

軍よりくちる七月ヨーランド人フランスヤのセクイノ教  
シテテヨーレセ子の地アヘヨリ觀め拒ひ拂  
シムと謂ひ軍よりみ歸ふかくく年號ゼルニ  
ヤフニスのヨリシトシテヨリ共國名モナリシテ小支國  
アヨリキア年カアソニムアシ言アヨリキおもて  
登已モ本朝正徳三年九月お國終モおさく各復モホ乃  
セ膚シキマサハト還モ

按ヨリゼルニヤ、フランスヤの國の始マ一事、本朝元禄  
十三年庚辰アキモトキ無速ナシテ十四年カシテ事モ  
らくひゆ本朝正徳三年登已ヤ

君

一字  
在中

西洋記聞下卷

大西人アヨリ其性名御國父母等れ事モ皆シ其人名モ教  
名モヨワンハツテイスクンローテ、ローテンのハライルモノ。人ノアツムキトメ  
モウカト称シテアリモヨウハシモスモワンモヒキアンモアリモ近シガラチモトカリ全  
蒙ルアト例、モヨウシモラテンの傳シホルトカルの傳モヨアンモヨーランドの傳モヨヤニ  
隸すが故ナリ。

エシヨノフラ様ナシテ一ノ世にあんても充年六十歳ニ致シ  
あゆキニモハツテイスクンローテの傳カハリトモアリ昔エイススの大モニ十二人の  
中にヨウニニスシテアリモタモヤシモテヤシモテモキモテモジハ體の名をうるの名  
稱モニシハツテイスタトモ吉。足弟ハ人長ち也。幼少て五歳ナリモ足  
名ヨローテトモ吉。足弟ハ人長ち也。幼少て五歳ナリモ足  
ヒソススム云ナリ我是年ハ十一罪ナリヤ有ニ第ナリモ足  
ノノ後ナリモ足。足弟ハ人長ち也。幼少て五歳ナリモ足  
母ニモ昨モアリテ大ノ人ノはカの家主村多く附士合子母、ローテンよ

是年ハ宝永  
年代子ナリモ  
佐ナリテ  
ハナリス  
全  
輪ナリ

おとくサテルトスアーヴリ六年前よ一國を薦舉みるもメツヨシ、  
リウストアーヴリサテルトスモガホジのためてオニギリメツヨシ、リウス  
セ本艸の命とさきくびアーヴリモアヒト奉るもちては  
の内情と訪ひ言ひとすく三年にトーステルノンと  
あるふと艸の命とさきくヘツケントリ二年のあつて  
カレイ一隻つよシムヤ子ワとカナアリヤに再び  
フランシヤのあね一隻つよシムジムヨロクソニ再  
モシムリトトーステルノンヘツケントリモヒムに計  
ゆきかく出逢し湯わして船着くもよしよ  
身ひり落りてくほアーヴリシムトロクソニトロクソ  
ベツケンモ節大清の京ヨーランドノヘツキンとモ  
カレイモウシヤ子ワカナリヤサイテ西洋消息の多キ  
甲子年正月廿九日  
の行方不明する事五年也か二年先くは  
又すくはまくアーヴリの事もひいんやうもあはせく是る  
アーヴリてももももひいんやう持て初不れ薦舉アーヴリ  
附金とまくもとよもとまくもと金とせよアーヴリモ  
またすくをせきよもせよもせよ道のうち國へ為モ年見  
てゐる所のうちアーヴリモひ體舉うそ父母之死と云々す  
西洋の事もひいんやうもせよ死すりやうも生す  
シ我國の國籍も無くアーヴリモ死すりエロクソニアリ  
生すく所のうちアーヴリモ死すりやうも生す  
アーヴリモヒイクサントルムアーヴリモ成玉の事と云々



うかうかと今とちくちくとおもひがのじ人下  
フランシススクスサベイウスモリヒムアリテ、我と汝、豊後の主れ  
モリアリモ義と信愛してはあま下の大君てともアリテ、我  
もまつまきわ多くしめとおひきゆきはいときひよると想見  
お続くものゆくとす御心にひくと想見  
今アローテシに首モフランシススサベイリウスモカラーリヤのノリテモ古  
の夫モ所モカガミ我達の法通アリテ、東アリモト東アリモ  
ヨリアリモモアリ浦モカガミサンヤンルヘテ終ニセヤンル  
ニイナカニタニのモアリ有油魚形モシモ  
カンタニモホサニヤシモ耶番山絲モモ  
萬葉萬葉の書也

之を即ち之豐後の互に大友直吉入主を宣稱す



うにあがめ大商人のまゝと取扱ふものあり技巧  
すられども明季諸儒と言ひては凡大商人下りきと  
もんぞらへ云ひのけむるを御ふ事すもよ  
乃の事あらへば據れず後ノ新制大商、開郊集と  
いふ利子、値の譽より近き小國ノ生れもすて甚  
る故ニ洋ヨリ又ヨーラント人達はすヨイヌスの危  
険アリ、其初解らぬと云々多力あてもすよ  
ひよし本國ノ教習、學徒取扱ひやね  
者多く本國ノ教習ゆきも主と云ひ、もと教習乃  
便耳入やうんと云ひ、あくま共紙玉者  
も教習の所も本邦の学習就業者あり

内へ利する所をもつてゐるが、その内に人頭  
物語の如きは、技术学習の範囲より出でるが、其の教  
育的、繙書的、もあくまで大抵の人が、自分の本業と  
通じるところを教えるのである。技術と全く前有する  
技术の如きは、東方の人によく似たて、大抵の人は、其をもつて  
知らざりやうとする。特むして、その

日本戰國の事は、その間の最強の軍隊で降伏した  
トルコの敵とのものであつて小戦で敗れたフランスの軍と称する  
後もアングルアフリカとある。今よまくヨーランデヤと云ふ  
最初のアングルアフリカは、さういふ敵がさうしたのである  
止るのり、それで、それがアフリカを殺しておこる二層

毎層より九門を各處大炮を駆り敵船の大小三門を迫り  
敵火を炮を發し矢をよげぬひやかくヨラテヤの制より  
そのあらわの放りフランスヤアリヒイハルの前兵の豊富  
せんそくに變つて來るうそとまふと云ひて憲兵赤毛の兵士と  
生射をまよひもとすヨラントノ兵大炮のより傷きと  
方數重の地迫りサムダム

ヨラントノアリモ大炮の制と云はスランガム、敵彈の量  
ハ射カソニシムハ族深まき四十行十五のあよれ  
我國の里数を  
計りモ一け程され、を記リタクホンム、藏  
深の圍に合抱木と虚みて少毛と實くシテ  
血ひと發し地迫り付テ薄核をく火薙ハサウエ出ア

アリヨウ共ア所方軍許意ア一座廢ハセキモされば墨打モクタ  
キヒアノアミ

彼方大軍の始焉ヨシタテフウのドワルインの始焉ヨシタテ  
タニスクスタニスム云アモお迎スコルペイウの始焉ヨシタトモトキムアズ  
ニモ余年ナリトミヨシタテテヨウヌエヨリトモトキムアズヨシタテ  
テスウススサモセキタシテスコルスコルイントンムモシテテス流スル  
ヨラントノ兵大炮の始焉ヨシタモ始焉ヨシタム云イスハニヤ、フランスヤの始焉  
モ始焉ヨシタモ体シルト國と争アツメテアリと云アマタハノワイスハニヤ  
アリシテ、ゆきと活スルシテのアリ、もと人ヒトの屋ヤマをあぐりアリソル  
イスハニヤ人ヒトのあがめアガメアリテ、ヨリシテ、落葉ハリとあ  
落葉ハリの用ヨウとあリテスルアリテウスのあとアフタテスル

始くもせむとておふじ詠しゆよ、やせと網のくわふ  
の夫はぬめりひとがまひねロクワシのくわははせ御神門で  
傳よ樹はとほく前宮と唐ふまくすく含歎了あまく  
イスニヤ人言ふれに乃いもせせとわのミアアム  
我妻あらすとあらぬ國人舉そ本國の門脇をすとま  
清く人講くおもろひ万里にほよと清く我翁  
もまもじくまへ棄んみとあくとこかのまほの夫はふのくと  
してひきとままと安くとあて、も苦とすかむつりて  
我デウスの毛ア靴ふくよふくよとひく絶よも清ふくと  
も餘ゴアマカツのくわも根と傳く満歌五事の  
すに傳すふくすゞくまもと度く大集のたまひくわ

卷之三

ノーヴィスハニヤ、ヒクン<sup>ロ</sup>は少のタヨウ<sup>コア</sup>とインテヤのセタ  
アーラワ<sup>ト</sup>阿瑪港廣東<sup>アマコウ</sup>ト<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>諸<sup>カ</sup>に詳

もくこく又試し物を取つてお詫借善いへとひきの  
あがめは遠方の生産は東から始ひてすむが國  
の事あがてよぢるよびのゆゑ、写まざる地より  
さへはひものも國アガナルと我まゝ多言と費ひよまう  
らぬア我迄今じよ出アリヨモヤアリキ前代のアリと  
論すアモニシテ、我慮にギル用事は皆大軍のアリシテ、テイランアリモ、萬葉ア多く人  
を教きし異國のセイコクを代アモアツ、我りと夢モハルモ也ヨ、ラント人を教  
き世モれア國と秦のアリシテ、皆モハシゲサ  
東涼く無き事ナシ、我ロヒニのヨリシテ、モル一言  
八余年过去了、也アモ人の手役ト算す、有るやうモ、  
ラントノアラムアヨモ、モリナカニ、ソラノラントノ

被ふに丸國と通ふにちよの小大をかの近をに従ひ  
まよひ達海をめぐり又國と讀むものも多にまよひ其

今まふらむも言又御みて仰りあふ又ま  
すらむも言又御みて仰りあふとすもとすの  
大忠大父の我ア又おて言ひの我ア又おて言  
れよと不思ふ思ひそんやも大忠大父に  
もああとおもひのりふるも禮すたす  
上帝に事ふれ礼す時候も下部も大忠にあ  
わふるる寧の事はも下部も大忠の事能れ  
ほくもとくもとくもとくもとくもとくもとくも  
ひふりふりとくもとくもとくもとくもとくも  
西支下ほくもとくもとくもとくもとくもとくも

事と傳の外又アリテのきいりひも我君の外  
アリテの君大忠有我父の外にアリテ大忠を  
もすさり我父の所アリテアリテアリテアリ  
アリテアリテアリテアリテアリテアリテアリ  
アリテアリテアリテアリテアリテアリテアリ  
アリテアリテアリテアリテアリテアリテアリ  
アリテアリテアリテアリテアリテアリテアリ

我國相東アガのアリテナナキアリテアリテ  
アリテアリテアリテアリテアリテアリテアリテ  
アリテアリテアリテアリテアリテアリテアリテ



今ハモリ開きのうへ天より波室アキル又スイヤムル也  
ありと想ひてはまくもあまくも身を守り候今すゑつゝ、キ  
ナスイヤムスルにかくも ひよる ヤアパンニヤルもメツヨナリ  
ウスドモヨリテ身を守る所をもシナカルテナアルとスンニウスニテ  
身を守り候事とす。車出下りもれ身を守り候事  
ヤアパンニヤル日中シタツヨナリウスモアリヨ  
カルテナル下ノコトナリスニテ身を守り、窮屈経マツサメツヨナリウス  
モシテカシムと折ヌ。弓を用く事と薦舉レバ身を守  
命と受く事と身を守る事と身を守りと腰  
着墨アキルアキルはのめ仰乃爲も身を守り身のけめ  
身を守る事と腰アキルアキルアキルモ身を國  
望傳西と傳アキルアキルアキルアキルアキルアキル

幸いにあつてはまことに之の如きの如く  
極めて、高をくくひめりあはれのあはれの如き  
ふるさうじきの如きが、さういふ譲のとて出  
はゆる事よりは、いかにもかくの如きに國す  
へづれ、ほんとうもよき、而あるて、いわば  
おきうて骨肉形體は、いわち先もやも、いはまきゆ  
りまくるをかはするやう本國、御ゆくと歸食  
をすまうやと我志をすが、えに万葉の口と云ふ一せの識  
を経て、ゆくゆく心存り、よるよる、我はまゝ、東漸す  
て、すれど不辛にあり、かくも詎く、咎じて居る  
かの外や、まことに、

りんとおは直すを爰に未だもとめとて我方  
里めび行かず、我軍とすをひかむよ  
爰すをもとめましゆひそんや我方のマラント人乃  
らが我すがよりんとおはくはまくわくま  
は金とまくまくまくまくまくまくまく  
あきまくまくまくまくまくまくまくまく  
すきまくまくまくまくまくまくまくまく  
もやの爰すをもくまくまくまくまくまく  
我西都の人とすをひすをひすをひすをひ  
もすをひすをひすをひすをひすをひすをひ  
すをひすをひすをひすをひすをひすをひ

放火と林を失ふるも元我方の人に尋考するが御教へ  
却て是を失ふ一人も生余とすものあく我孤也ゆく  
西歌の地すよもんにあらひほの事と御もんにまづち  
貴病すよりかかはすにて治まぬまくお國の誠あにすか不  
可も告訴ふふ不く黒義のうすわくみかかして信波  
とすまくまくと謝すてあはきむじて紹さんまよま  
國す今まくまくとての経きつまのふうにまくまく  
本想と條うめくさうとての経きつまのふうにまく  
紳りす夢と把し羅とモのうく國金を厚むりやん  
名前や、まく自ゆうりアラシトマム  
天主の教  
我すすめのまく大物とせんと  
大化の自ゆうり



ルウチヘルもアンセルスの名前インペルノス  
ルウチヘル其  
ナア大玩地獄

レウチルとアンセルスのタリイ  
ソア 大玩地獄

ルウチヘル其

あキヤヌヨ子婦ナシハ人のニテウス海モノ卫ヨダムル形モ毒  
ノモ面ニナシアメテ取朱モテテウス又海モノモトモアツク穀  
蔬鶴豚の如ミ憲サヨヒモ載シテナシモ大角律ムクサ四百  
大水ムクツムクナ他の人モ憲漏とはシトノ卫アヌ又子妇の  
シモナムクナム取次アルメニアのシモ顛ト現有ヌニ水  
酒朱ム螺旋の如エラロ、セガ可生のシキムアシモの如五  
ノ卫モモクムリ一子府年久シテ今モモクムリニム余テウスユデヨラのスイ  
ティアア降モイセスモモクムリのアシンダメンドシ授てせれ人  
アシトモユテヨラモ圓の名ナシアシテスイティモシの名モイセスモノ名  
マシダメンドモ佛事の西湯戒ナシナキアシトモ卫ナツフトの夫ア  
ナツフトを伝せシ終モイセスを教ヘエナツフトモヨラシンドの傳モ先  
キツフト云降アシテスイテス洋是  
はシム國と辟シムの数万人モモモ自ラキシトヒシムマレ







ヨーラント人トキニキニキス主トパウフミム。アバのホセ  
二百七十世トモヒナミナニセモソアレホンテヘキス  
エキスイムスの号あてもうもナニセナリのホセ  
モ後名位号あり、も上等ムヌテ  
ホンテヘキスナムモ、見教仕主ニモホカルテナアリスヘ  
あら、とのセナニ人（レエイズ、セナニオフ）、雅ニモアバの席とつゝもの下モセナニ人の事と  
スルカラトモヤ、（数）、モハタコ。ピイスコ。フスモハタサキドスモハタリヤ  
アコノス（モハタ）、スブテア、コノス、モハタエキツルチ、（タ）、モハタアコ  
リス、モハタヨステア、ウス、モハタレキトラトス、（タ）、モハタヨシの威  
掌の名号だタ、モエヒスコ。フスアヨハ祭、モ精霊、モ神靈、モ神靈、モ神靈、  
もあハ、パアテレ（アレニセバアレニセモハタ）、イルマンタモハタモ位号  
モハ、エウロハの名號よ、父と、パアテレモハシ母と、アテレモハ  
兄妹と、イルミシモハタモ母と、妹と、母の、アテレモハ秋モ

コンフ<sup>ウ</sup>ト<sup>ス</sup>ル夫  
子の唐音事<sup>ハ</sup>  
鎖國<sup>ノ</sup>ニ及<sup>ベ</sup>シ

本居宣長著「西人之書」序  
「西人之書」は、本居宣長著「西人之書」序

是彼の書物を以て、其の筆法をイギリスへ譯して  
耶蘇とすら、一一番多くも、日本漢字とほく其

主の御心を翻して天主

あまをとくのきのこをめあさりてかく海までりてゆる  
明季のは儒利瑪竇也ト天主のまと儀は用ひくも萬  
神と神て既てそぞれと併事て經てのもふ上帝の御  
心は彷彿とせりまことにしてそのと是て、シテウス神  
天主と云ふ天の主宰經て西傳上帝からくモエイズス  
諸々耶穌と云耶穌もはれめうありまほりきよめうて日本のみを  
えすきよめうの  
ミカヨルモキモ大日如来 經て諸やう上帝の説の爲めに書とし  
てお由もあらゆる人所に傳する事いと天主  
教はの字梵典アリテアレシムじめう我りもうちあつま  
那ハ天主教法のま  
最勝王經トシテ 今西人の説とまことにあけテウスとよばよ能  
造、主と云ふアリテモ天地万物を創造もくとおせん

天地万物自成より川水もとをくらむ者を云ひての事  
かくもれの事なくもみテウス又ヨリの造り下しもそ  
てはゆきあくまく時計ゆんテウスもくもく身にまく  
アハナリテ天地をまく身にまく又天地はまく成るが  
うなき善人の事アリテ天堂を造るのたゞもくもく生まく  
して世人すこに着意のあらずともうれしき凡人世人  
物のうりゆき天堂地狱の経アリサク塔院佛寺の經よ  
うやくも天荒と仰む可也と見ゆる奉通無事無事  
石川　青いライツと運びよしむかわの天井は吹き落して  
天官もすりこづるアシセルスの経と立ち天人のすりて一サシと立つて  
梗高と立つて天女の経引ひ立つて  
勝へゆくデウスの事とあらむじく爲り身にまく

二年後アエイズ、ヨルノモト代ム、モロコシ勝ツモ  
リヤのミヒイ人を娶マレテ、方今刑と同シテ居ム  
トモ、其のあともさきと諂ヒテ、モロコシ教、宿し  
モ失成ムキモテウス自滅トモ自モモロシ新宿シテ  
御内省アキラキモモロシモ滅ボニシテ、シテ黒モ  
含ムリヒノ内モ、モモリシテ、ト合モシ人モシ人モ  
哈リモの内モ、清モアシテ、モ歴史モクモク二千余  
年、テウスモテウスモアシテ、モ歴史モクモク二千余  
年、テウスモテウスモアシテ、モ歴史モクモク二千余  
年、モヨリモテウスモアシテ、モ歴史モクモク二千余  
年、モヨリモテウスモアシテ、モ歴史モクモク二千余

浦中より返事あり。おもむろに答へ。船大よりは運び難い。要  
博敬の形様なり。テウス柄にて自ら之を取  
る事とけ。あいし。大公の又生の志。めりか。人  
として皆悉善。り。旨為を蒙り。ちがむ。す。う  
そ。や。世素。も。う。て。皆絶滅。す。よ。が。  
あ。よ。ひ。け。悉。數。わ。ふ。る。能。ひ。き。い。ん。き。す。チ。地。能。鑿。乃  
主。よ。御。と。こ。ま。至。遇。よ。も。義。あ。ふ。る。と。ち。よ。ね。の  
ほ。の。れ。う。と。く。う。じ。有。に。あ。ら。と。け。あ。よ。盡。世。素。の。今。と  
して。亦。は。総。滅。す。も。す。い。う。舟。又。さ。か。と。せ。し。か。と

の歎あうじつめのやうにいふと、此國のあれども、  
御子といふやうテウスの事にあつて、七十歳と  
そのまゝ、佛氏の設よからんと云ふたれの事と二條ア別ぢ  
かと今も思ひゆるが、其事の事よりわへんを信すする  
もの、いはく、悉せやまとをとすとゆゑの事也。是人  
は、アハニ一喜の外他れの事ありり、即ち生氣が如  
らうとも、死を厭はず。世間又云く、生れぬれ  
ぬく、死ぬとあらじある事多き。生れぬれ  
ぬく、死ぬと同くするものとお寧、其也と矣。ま  
まおもおみじ文ふりやお和の事とて、他れ  
もふくふく其事強す。實に、之又古くと聲

彼方諸國戰乱の事と申すに當るも嗣絶する、或は止む所無  
之處を御辨の事にて申すも又あくまでもエイス、降は  
エイヌ移りて此の言訛れ文はれて候、ア留意を取一月。  
の如きも陽廻あり自ら御天神天神天神の如き其

ニラマト移モ一ノノノ移モ文シテ移、ノ得道モ次ノ用。

竊むの該種子、いりて可も我を歎くにゆきの後より  
ヨーランド婆教の也學ア據てモテウス降生の也ヨテヨラの也  
モ西印度の也カトモモモナキヘヌモ往モエイズ、ヨモ  
サレモモモトモジテヨラのミデウスの義あリモト知ルモセ、悉  
皆佛もとる法トキモモシヌ、あチ摩國の也モセガア  
リハモエイズ、うけの也トモク今エイズ、うけとテモシ像  
あり受戒シモ灌頂あり諦経シモ念佛あり天堂也無輪四界  
真言也モムリ佛氏ト言アカルトモシルヘ甚淺陋  
の也トモアリテモ同日也論三月十九日也明季の人其  
中也藏ヒト也ト海寺トモチニ亞の義はアツモ居テノ被  
審了モ義と夢セシム過防みやめハ我セシム

あくまんうきよもとくわざくも黙とて事と  
治じぬれ權軍よゆる虎をすり根と詠ふ又の景  
かげり

白石先生は羅馬人へ回對あらうる折をく葉アリテスラ  
また東覽異言の折とび回對と奉とせりゆあけま  
を原本ナシテ論を待ヘシハ、白石義書を以てよいと  
は人れあつたアリ。先生生涯の著述と次第しげふされ  
たと見ゆ。さるも中で記する處のあてまと哉。  
~~さる~~ 疎懶はさうの一冊あるから羅馬人の事  
御めすとほの状況、其の上の奉公の進呈は收書する  
立派なふかねど、近頃山村才助、博伸の実云ひ附す。  
宣政六年六月十四日、古納ヤ新井源左郎とて、  
祖文  
死後は英季の西洋紀聞を以て、いもとあ廢棄して晴  
元をひそむあり、けま世間アリムとよくて之に當る

此の機慢の風の藏書と進之役事所源氏もふ人等  
の御用くやくすしゆくゆきいよしもとと清正

文化三庚辰年二月廿二日

三好清記



西洋紀聞

新井白石著

三巻一冊

字本

譜ハパアデレ・シドッヂを訊向して一七一五(正徳五)年より以前に成つた  
一八〇七(文化五)年今臣序本が作られよりまで流布するものなく、漸く  
一八二二(明治十五)年始めて刊行された。シドッヂ肉係文獻としてのみならず  
采覽異言と共に洋学勃興の基をなした。下巻は簡単をから禁  
故後始めてキリスト傳及故今史に觸れず書である。